

---

# ミッシング・リンク 3

榎 麻容

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミッシング・リンク 3

### 【ZPDF】

Z3398D

### 【作者名】

檻 麻容

### 【あらすじ】

覚醒していく。それぞれの想いとは反対の結末が、進んでいく。  
ミッシング・リンクはどこに続くのか。

## 星降る夜

冷たい風が吹く、十一月後半。

辺りは暗く、静かだった。風の音と波の音だけが響く海岸に一人はいた。

「海里 シリウスが見えるよ」

「一等星だからね。見えて当たり前」

海里と呼ばれた少年は夜空を眺めながら言った。言葉は嫌味を含んでいるが、決して攻撃的ではなかった。親しい人が聞けばその中に喜びが含まれていることを感じただろう。

今夜は雲一つ無く、星を見るのに最適だった。新月ということもあり、星は一層輝く。いつもは都会では見えない星々。海里は視力が良い方なので、小さい星まで見える。それが少し自慢だった。普通の人より多くの星を肉眼で見ることができる。肉眼だからこそ価値があった。何も物質を通してなく直接に見るからこそ云わるモノもある。

黒い布をかぶせたような空に硝子を散りばめたような星。海里には一つ一つが意思を持つているかのように感じた。

そして海と空は一体になっていた。水平線はほとんど闇に溶けていつてしまつていて、境界線が見定められなかつた。どこまでも空が続いているように見える。空に浮かんだ島にいる感覚がした。

「闇はよく嫌われるけど、闇がなければ光は映えないよね」

萤は暫く夜空を眺めた後、ゆっくりと海の方へ歩いて行った。一步一歩砂に足跡が残る。

その足跡に重ねるように海里も歩いて行った。スピードが、波音のリズムが重なる。

「広い闇の中で無数に散りばめられた発光体……自然の芸術だと思わない?」

「・・・うん。星はさ、誰かの夢かもしけないね。流れ星つてその

夢が叶うから流れるのかも」

蛍は薄く笑つた。

一人は強く輝く北斗七星を見た。北斗七星は別名『柄杓星』という。七つ星を繋ぐと柄杓のように見えるからだつた。

星の泉の中にある柄杓。それは夢をすくつてているようで蛍は不思議な感じがした。両手いっぱいに星が掘めたら、と小さい頃夢を見ていた。それは叶わぬ夢だからこそ、同じ星である北斗七星に願いを託した。きっと柄杓は夢を掴んでいる。

「夢、か。うん、そうかもしれない。夢だからこんなに綺麗で力強い」

海里は蛍を見て、微笑んだ。闇の中で海里の瞳は星に負けないくらい強く、輝いていた。暗闇の中でもわかる瞳。それは蛍の記憶が作り出した幻だつたが、現実と寸分も違わない。間違えるはずもない色だつた。

アクアブルーの瞳。それはまさに海の海の色だつた。

蛍は波打ち際まで小走りで行った。海里と同じ色の海は、今は黒く、全てを呑み込んでいつてしまいそうだつた。

永遠の闇。空なのか、海なのか。呑み込まれるなら空がいい、と蛍は何故か強く思った。

蛍はその闇の中に何か光る物を見つけた。

「あれ、瓶だ」

波が一時的に去つた後に残つたのは一つのガラス瓶だつた。蛍はそれを次の波までに素早く拾い上げた。

透明で無色のガラス瓶。ドレッシングポットに似ていた。しかし、コルク栓がしてあり、用途がわからなかつた。

海里は横からその瓶を覗き込んだ。

「「ミミじゃないね。ラベルもないし、大切に扱われてたみたいだ。でもなんで海なんかに?」

「さあ・・・どうしてかな。それにしても温かいよ、コレ」

蛍は手に持つた瓶を指した。微かに光つてゐるように見える。

「中が光っている？ 蛍、開けてみよう

「・・・コルク栓が浮いてきたよ」

海里の声と同時に、コルク栓が上へと移動してきた。キュツキュツという音と共に、だんだんと上がつてくる。密閉されていたのがよくわかつた。

瓶の隙間からは光が漏れて来た。淡い、青白い光。ガラスを通して見るより強烈な光だった。

「これ、星じゃないのかな」

蛍はゆっくり開いていくコルク栓を見て言った。

「じゃ、誰かの夢ってこと？」

瓶から漏れるだんだん光が大きくなつていいく。開ききつてから数秒すると光は弱くなり、消えてしまった。辺りを闇が侵食し、支配する。

瓶の中に残つたのは一つの石だった。

「海里の夢だよ」

蛍はきつぱりと言つた。両手で包んだ瓶の中に見えたのは青みがかつた透明な石。自身が発光しているのだろう。形、色がはつきりとわかる。

それは海里の瞳そつくりで、石とは思えなかつた。

「俺の夢・・・ね。じゃあその石は蛍にあげる」

「なんで？ 海里の夢なのに」

「だから。俺の夢だから。流れてきたつていうことは叶つた、ということだろう？ ジャあ必要ない」

海里は蛍の中のガラス瓶の横に落ちたコルク栓を取つた。そして、ラムネの入つていたガラス瓶に入れた。

コルク栓は中に入つているビー玉の上に乗り、溶けていつてしまつた。ビー玉の中に溶けたように見えた。

「海里の夢つて何？」

ガラス瓶を上に掲げてビー玉を見つめていた海里はふと蛍の方を向いた。口には少しの笑いを浮かべていた。

「秘密。些細なことだからわ」

「些細なことなら教えてよ」

蛍は真剣な顔で海里を見た。海里は微笑を返した後、側にあつた岩にガラス瓶をぶつけた。高い、嫌な音が響く。

ガラス瓶は粉々に砕け、破片が飛び散った。それは月光で輝き、まるで星のようだった。人工的な星。しかし、美しさは引けを取らない。

海里は散らばったガラス片の中からビー玉を取り出した。

「また今度ね」

海里の手の中で、月色のビー玉がひつそりと光っていた。  
まだ、夜は明けない。

「怖くないとはいわない。でも今はその時じゃないから・・・誰かがあの人有意思に気付かない」

蛍の目からは涙が一筋流れた。海里は前を歩いていて気付いていない。

蛍はあの人に一番近い存在だから少なからず影響を受ける。それは片割れも一緒だつた。

ガラス瓶から伝わつたあの人の思い。瓶を手に取つたのは偶然なんかではない。蛍達に起こる事は全て必然だった。それはプログラムの前兆で。早く、誰かが気が付かないと。自分では何もできないことが蛍にはわかっていた。

## そして、始まる

「夜宵！」

公園のベンチに座つてうた寝をしていた少年は、顔に当たつた冷たい手に反応して目を覚ました。低い体温。しかし不快感はなく、どちらかといふと安心する温度だつた。

夜宵と呼ばれた少年はその手を掴み、後ろに立つ人物を見上げた。そこには予想していた顔があつた。

「冥里…」

冥里は田が合つと、反対の手に持つていた本を夜宵の額に軽く当て、微笑した。

木漏れ日が反射して、冥里の髪は栗色から稻穂色へと変わつていく。それを夢見心地で眺めていた夜宵は冷たい手を離し、本を受け取つた。ペラペラとめぐり軽く活字に目を通す。大半は必要のない情報ばかりだつたため、軽く読み流しても支障はない。

「ありがと。見つかつたんだ？」

「まあね。言つていたのは無かつたけど…人気の案内書じゃなくてもマイナーなものもイイ線いつてるだろ？」

「…うん、確かに学校の特色とかわかりやすい」

マイナー、という言葉に夜宵はくすっと笑い、学校案内の資料を軽く閉じた。そのまま膝の上に置き、ベンチの背もたれへと体を預ける。

軽く目を閉じ深呼吸をすると、心なしか体が軽くなつた気がした。冷え切つた体に清涼な空氣が染み込んでくる。

「夜宵は何処へ行くんだっけ？」

いつの間にか隣に座つていた冥里は夜宵の膝にある本を取り、めくりながら尋ねた。ペラペラと速くめくついても冥里には内容も把握できていた。

夜宵は一度ゆっくりと瞬きをしてから冥里を見、手元の本へ目を

落とした。

「プラネ科の方」

「ふーん…僕もそうしようかな」

冥里は表紙から数ページめぐり『プラネ科』の学校目次を探し、指で名前を追つていった。またページをめくつしていくのを見ながら、先ほどの冥里の発言を聞きとがめて夜宵は驚きの混じった声で聞いた。まだ眠気が頭を覆つていて反応が遅れた。

「冥里はストーン科かファイジー科だと思つてた」

「ストーン科は発掘とかだからあまり興味ないね。ファイジーは…興味あるけどそれほど勉強したいとは思わない。プラネだったら昔から趣味だからね。学習意欲はあるよ」

「…何処の学校へ行くの？」

「んー…やっぱりこの辺かな」

そう言つて開いたページの一箇所を指す。そこには偏差値六十五の有名研究所の名前があつた。

「やつぱりそこかあ…うん、冥里にはピッタリだと思つよ」

少しガツカリしたものの、納得して頷いた。自分勝手な我が儘で冥里を巻き込むわけにはいかなかつた。有名な学校ほど設備は良く、専門を極めるのに向いている。わかっているけど失望は隠せなかつた。

それを見て冥里は微笑し、本を閉じた。そして本を夜宵に返し、ゆっくりと立ち上がつた。

落ち葉が力サツと音をたて、風が弱く吹ぐ。

風で流れた栗色の髪と同色の瞳を夜宵の方へ向け、無表情に言葉を紡いだ。

「道はいつでもたくさんあるんだ。今までだつてそうだつたんだから。僕達は偶然同じ道を歩いていたにすぎない」

「うん…偶然だよね、全て」

『でも』

夜宵と冥里の声が重なつた。

二人は顔を見合わせ、笑つた。

夜宵はお先にどうぞ、と手を軽く前に出し、冥里は頷いて言葉を続ける。

「でも結局は同じ道に繋がるんだから。違う学校に行つたって専門が一緒だから同じ場所で働くし。同じ研究チームつていうのもアリだらう?」

冥里の自信有り気な発言に苦笑し、夜宵は言いたかったことが大体同じだったため、頷く事で肯定を示した。偶然でも必然でも、道はきつと一度は交わっている。

「うん…そういうものもあるよね。結局道は関係ないよね、途中過程だし」

夜宵は本を手に取り冥里があらかじめ折っていたページを開き、破つた。そして隣にある偏差値六十前後の学校案内のページも破り、本をベンチの上へ置いた。

「やるね、夜宵も。思い切つたことをするなんて君らしくない」「らしくないことをするのは冥里の影響だよ。あーあ、いつからこんな僕になつたんだろ」「

ね?と笑つてからベンチの淵に手を掛け、勢いよく立ち上がった。落ち葉がクッショントなり、足にはほとんど力がかからない。

そのまま一、三歩進み、振り返つて冥里に破つた紙の一枚を差し出した。

冥里は可笑しそうに微笑みを返してそれを受け取つた。

「さあね。常に人は周りに影響されているからね。でも本質は変わらないさ。自分自身のモノだからね。願わくは君が立ち止まらないよつに」

紙片を顎に当て、にっこりと笑う。

夜宵はそれを見た後もう一度振り返り、前へ歩きだした。その後を冥里がゆっくりとついて行く。

「あつすごい! かなりマイナーな本がある」

綺麗な澄んだボーカルの声に「一人はベンチの方へ振り返つ

た。

そこにいたのは同じ年くらいの少年で、二人共近くの有名な学校の制服を着ていた。ダッフルコートは指定だが、マフラーは自由で生徒は様々な色のマフラーを巻いていた。

一人は濃紺で一人は深緑。濃紺のマフラーを着けた少年は夜宵そつくりで、冥里と夜宵は顔を見合させた。似ているのではなく、そつくりだった。

「葵、『マイナー』ってどんな本なんだ？」

「これはかなりの掘り出し物だよ。ずっと探してたんだけど無かつたんだ。ポピュラーのよつすじく良い。『プラネ科』が充実してて……あー！」

本を手に取つてペラペラとめぐりながら話していた葵は、破られたページを見て叫んだ。

「偏差値高いトコがない！」

「ということは同じ所を狙っている人がいるってことだな」「そつか……」

「まあどんなヤツか楽しみにしておこう。な？」

本を握り締めたまま迷っていた葵は隣に立つ少年、十夜を見、頷いて本を十夜に渡して夜宵達とは反対方向へ歩き出した。

夜宵と冥里はしばらく葵と十夜の背中を見ていた。

突然、葵は振り返り夜宵に向かつて言つた。

「道には交差点がつきものだよ」

「葵？」

訝しげに葵を見、十夜は早く早くと葵の背中を押し促した。

本屋は逃げないよ、と苦笑する葵から視線を外さずにいた夜宵は冥里の肘をつつく動作ではつと気が付いた。

「あれ…どういう意味かな」

冥里は肩をすくめてさあ？とだけ言つた。

「きっとまた会えるんだね、『十夜』と。そんな気がする」

「ふーん…じゃ会えるんだよ、きっとね。僕ももう一度会つてみた

いしね『葵』に

二人は顔を見合わせ、頷いて破つた紙を風に流した。自然と声が重なる。

『交差点はつきものだから』

「葵・・・僕が覚醒したということは始まりを表しているんだね」  
葵が去った後、夜宵は軽い頭痛を感じた。蘇る記憶。感じる片刻  
れ、螢の思い。葵は今後悔している。

決定したのは随分前のことだった、と夜宵は思い出した。長い年  
月の間に何が起るかなんてわからない。そして彼らに出会ってし  
まつた。皆、意思を変えられるなんて思いもしなかった。でも会つ  
てしまつた。夜宵も螢も、そして葵も。運命は残酷にも突然訪れる。  
失いたくないのにプログラムは作動してしまつてはいる。

「お迎えにあがりました」

葵の前にどこからともなく現れたのは浅葱だつた。無表情を作ろ  
うと努力しているが辛そうに見える。何が辛いのか誰にもわからな  
い。正確な答えなど出せるはずもなかつた。

「うん・・・わかつた。じゃあ十夜・・・」

葵が何を言つてはいるのか十夜にはわからなかつた。しかし葵は浅  
葱が現れた意味を理解し、それに従おうとしていた。十夜にわかる  
ことはただ一つ。葵はそれを望んでいないといつことだつた。

浅葱の出した手を葵が取つとした。

「葵！ それでいいのか！？」

葵は振り返つた。十夜の予想は当たつていた。葵は今まで見たこ  
とのない、悲痛の表情を浮かべていた。拒否、そして絶望。悔やん

でいるのがわかるが、葵はそれに反して浅葱の方へと向き直った。

浅葱は葵の手を取つた。倒れ込む葵。葵が意識を失つたのがすぐにわかつた。体重が全て浅葱にかかる。決して葵は軽くはないが、浅葱は重さを感じないのか、軽々と抱えていた。行動を起こした浅葱本人はもう表情を作ろうとせず、ただ泣いていた。

「あなたが望んだことだ・・・」

二人は消えた。十夜だけがその場で立ち尽くしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3398d/>

ミッシング・リンク 3

2010年10月8日15時05分発行